

規則のパラドクス、あるいは関数適用の明示化不能性の問題

: Frege、Wittgenstein、そしてその彼方

岡本賢吾 (Kengo Okamoto)

東京都立大学・客員教授

Wittgenstein が（少なくともその中期の活動以降、ほぼ一貫して）論じ続けた、いわゆる「規則順守のパラドクス」の問題は、特に S・クリプキの著作以来、Wittgenstein 研究の内部だけでなく、哲学全般や周辺諸学の論者をも巻き込んで、非常に広範かつ熱心に論じられてきた。その過程を通じて、（特に文献学的側面については）現在ではほぼ明らかになったと言える事柄も確かに多々存在しはするが、しかし、ふつうパラドクスと言えは何かの“解決策”が求められる（解決不能だとか、解決不要であるとする意見も含めるとして）にもかかわらず、ことこのパラドクスについては、現在のところ、広く受け入れられた回答も、またその候補となりそうなものも明確には存在しないと言わざるをえない。さらにそれ以前に、このパラドクスが、そもそもいかなる哲学的問題を主題化しようとしているかということ自体、論者によって種々雑多な意見が見られ（発表者自身がそう考えるわけではないが、実は一般に信じられている以上に空疎だったりトリヴィアルであったりする可能性もいきなり退けることはできないだろう）、現状はある種の混迷状況を呈しているように思われる。

本発表は、もちろん、これに対する何か特効薬のようなものを用意しているわけではないが、しかし、これまであまり論じられてこなかった以下のような2つの観点を導入することにより、従来見過ごされがちであったこのパラドクスに含まれる問題の一定の側面に光を当てることにしたい。

第一に、そもそも Wittgenstein はどのような問題を検討する中でこのパラドクスに逢着したのだろうか。彼が多くの場合に、具体的な規則の実例に挙げるのが数学的なもの（初等的な規則性を持つ自然数列の始切片の延長、自然数の雑多な組みに対する四則演算の複合の適用、特に十進数算法の使用など）であることから、彼の元来の問題意識が何らかの数学の哲学上の問題にあることは明らかであろうが、しかしそれはより特定して言うとはどのようなことだろうか。これに対する一つの回答として本発表が提起したいのは、（十全な文献的裏付けを提出することまではおそらく望めないが）Wittgenstein がパラドクスの所在に気づいたのは、飽和性 (saturatedness) vs. 不飽和性 (unsaturatedness) という、Frege のよく知られた（おそらく“悪評高い”）次のような形而上学的所説を批判的に検討することによってだったのではないか、ということである。Frege によれば、数や命題（思想）のような「飽和した（独立自存的な self-subsistent）」存在者である「対象」を自らの「意味 (Bedeutung)」としている「固有名」の場合とは異なり、インフォーマルな数学的ディスコースの随所に登場する「関数名」（現代のふつうの言い方では、「(有限高階の) 開放式、あるいは開放項」に当たると考えられる）については、その「意味」であるものとは、「関数 (Funktion)」(ある

いは「概念 (Begriff)」)という独特のタイプの(それ自体では非自存的で、適当な種類の対象を「充填」されることによって初めて自存することとなるような、何らかの「空隙 (gap)」を含んだ——とはいえ、それって一体何なのだろう?) 存在者でなければならない。この Frege の考えは、そのままでは種々の不可解さ、不整合性といったものを伴わざるをえないし、実際に従来多様な批判を浴びて来たわけであり、Wittgenstein 自身、『論考』をはじめ、それ以降幾多の彼のテキストから窺われる通り、そうした Frege 批判を自分なりの仕方で常に推進しようとしていた。詳しくは当日の発表に譲るが、規則のパラドクスの考察へと彼が導かれたのは、こうした Frege との批判的対決を通じてであった、というのが本発表の第一の主張点に他ならない。

ところでしかし、同時にこのとき見過ごすべきでないのは、不飽和な存在者としての関数という Frege の考えのうちには、現代論理学の目から見れば、十分尊重されるべき一定の先駆的洞察が確かに含まれていたということ、さらに言えば、そうした洞察を再生・発展させることを、まさに Wittgenstein が規則のパラドクスについての考察を通じて追究していたように思われる、ということである(これが本発表の第二の主張点である)。

では、その先駆的洞察とは何か。とりあえず一言で述べてみると、それはすなわち、インフォーマルな数学のディスコースをできるだけ十全な理解可能な仕方形式化する(それは Frege 以来、現代にまで引き継がれる、現代論理学の基本課題と言ってよいだろう)ためには、上で触れた Frege 的な関数名(不飽和表現)、すなわち「(有限高階の) 開放式、あるいは開放項」というものが、理論上、非常に重要な基礎的役割を果たす、ということである。詳しくは当日に譲るが、この点を例証するために、発表の間では、高階タイプ理論、圏論意味論、部分構造論理(の様相論的拡張)について、ごく簡略ではあるが取り上げ、これらの近年の論理学の発展が、Wittgenstein 哲学との間に興味ある interplay を展開しつつあることを指摘したい。